

神奈川県のマヤラン類

柳川 定春・高橋 秀男・大場 達之

On the Cymbidium Sect. Macrorhizon in Kanagawa Prefecture

Sadaharu YANAGAWA, Hideo TAKAHASHI & Tatsuyuki OHBA

はじめに

日本のシュンラン属には緑葉を欠く腐生の種類があって、マヤラン、サガミラン、サガミランモドキ、タイトウランなどの名がある。これら相互の関係は不明の点が多い。相模蘭、相模蘭擬などの名にもあるようにこれらのランは神奈川県に浅からぬ因縁があり、事実神奈川県内からの報告もかなりの量に及ぶ。高橋および大場はこの類に関心を抱き、三宅島、国立科学博物館附属自然教育園などにおいて自生の状態をやや詳しく観察していた。柳川はマヤランとサガミランに比定されるランを秦野市において発見し、やや長期にわたって生長の様式、形態を観察してきた。また第二次神奈川県植物誌調査会の活動が軌道にのるにつれて、新たな産地も加えられつつあるので、神奈川県内におけるマヤラン類の分類と分布に関するこれまでの著者達の知見を総合しておくこととした。本稿をまとめるにあたり、標本の検討をお許し下さった国立科学博物館の金井弘夫先生に厚くお礼を申し上げます。

形態

著者達の観察した個体は結局2個の分類群に帰結する。この両型を主として秦野市産の生品およびそのフォルマリン浸標本によって記載すると次のようになる

マヤラン：根茎は白色で太さ3~7mm、表面に短い房状の根毛群をやや密布する。下部はやや斜上し上部は直立、疎に分枝し、主根茎と分枝根茎とは鋭角を成す。根茎の先端は花茎に移行し、根茎は仮軸分枝状となる。花茎は直立し高さ22~30cm、径2~3mmで緑色から紫褐色を帯びた緑色。鞘葉は7~10個で下部のものは密接し抱茎、上部は次第に疎隔し浅く鞘葉の基部が抱茎、長さ10~15mm、紫褐色。花は花茎の先に3~

5個つく。苞葉は広披針形鋭尖頭で長さ5~10mm、紫褐色を帯び、基部は花梗に密接し上半部は離れる。節間は最下の着花節から下に向かって59, 44.5, 24.5, 10, 7mm。子房は柄と共に花時において長さ18~33mm。花は蕾時上向き開花して側向。萼片は白色または上弁のみ、あるいは3弁すべての中肋ぞいに紅紫条が入る、倒披針状広線形で短芒端5脈である、上萼片は長さ20~23mm、幅6~7mm。側萼片は長さ20~22mm、幅5~6mm、花弁は白色で紅紫斑がある、長卵形鋭尖頭で上側が膨出し左右不同形、長さ15~18mm、幅6~7mm、7~9脈があり内面中肋上に肉質隆条が基部からやや3/4長の所までである。基部蓋柱を抱き、上部1/3が外曲する。唇弁は広卵形で浅く3裂し紅紫斑がある、基部広潤部に2条の肉質隆起がある、基部広潤部は蓋柱を抱き先端の中部裂面は満開に至って外曲する、13~15脈があり隆起条内に3条あるのを通常とするが、5条あるものが1例観察された。蓋柱は白色で長さ12~13cm幅3.5~4mm、背面に2凹溝がある。果実は観察が充分でない。花は6月下旬から7月中旬に亘るが、7月初旬が最盛期と考えられる。また茎が切損すると同年中に新茎を分岐して8月に至って咲くことがある。

以上は主として秦野産のものによったが、他地域のマヤランと考えられるものはほとんど同一の形態を持っている。秦野では2ヶ所で観察されたが、何れもクスギーコナラ群集に同定されるやや古い二次林の林床に生じていた。他の場所ではスダジイ林、ヒノキ植林、メダケ群集などの林床から得られている。

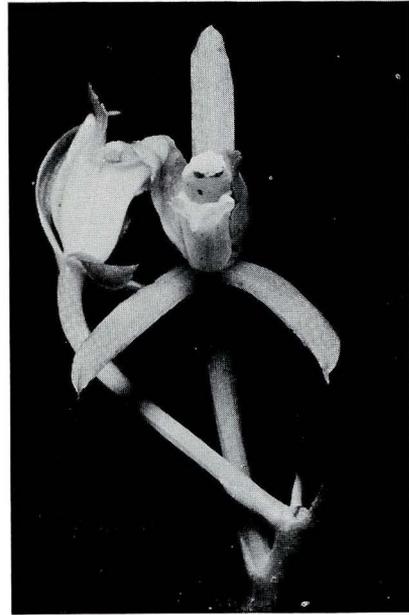
サガミラン：根茎はマヤランと同様でやや細く、分枝が少ない傾向がある。花茎は高さ9~13cm、径1.8~2.7mm、緑色。鞘葉は緑色、長さ6~13mm。節間は1例を挙げると最下の着花節から下に向かって59, 42,



第1図 マヤラン *Cimbidium nipponicum*
(東京目黒)

20, 7, 3.5mm。花は1~3花, 稀に5花, 最上花は未熟で消失することが多い。苞葉は広披針形鋭尖頭, 最下のもので長さ4.5~6mm, 花梗に密接し果期に至るまで緑色を保つ。子房は花梗と共に長さ20~23mm。萼片は緑白色, 倒披針状広線形鋭尖頭またはやや芒状端, 上萼片は長さ18~19.5mm, 幅4.5~5mm, 側萼片は長さ17~18.5mm, 幅4mm, 花弁は白色長卵形鋭尖頭, 上側は膨出する, 長さ15.5~18mm, 幅6~7mm, 7~9脈があって内面中肋の半長にわたって肉質隆条があることが多いが, 不明瞭な花もある。下部蕊柱を抱き上部は外曲。唇弁は白色, 広卵形で浅く3裂し2本の隆条があり, 縁辺は細凹凸がある, 13脈があり内3脈は隆条内にある。基部広潤部は蕊柱を抱き, 上部は開花するに従って外曲する。蕊柱は白色, 長さ11~13mm 幅3~4.2mm。

秦野ではマヤランの産地に近いクスギーコナラ群集の林縁の崖下の崩積土上に見出され, マヤランと数十mほど離れた地点に生じていた。7月中旬に開花する。1978年は7月20日に初花を見, 終花は9月22日, 1979年は7月15日に花蕾を見ているので7月中~下旬に開花したものと考えられる。1980年は7月11日に満開であった。果実は凋花と共に急速に肥大し, 濃緑色となる。成長し切った段階で長さ柄と共に30~52mm, 幅10



第2図 サガミラン *C. nipponicum* form. *aberrans*
(秦野)

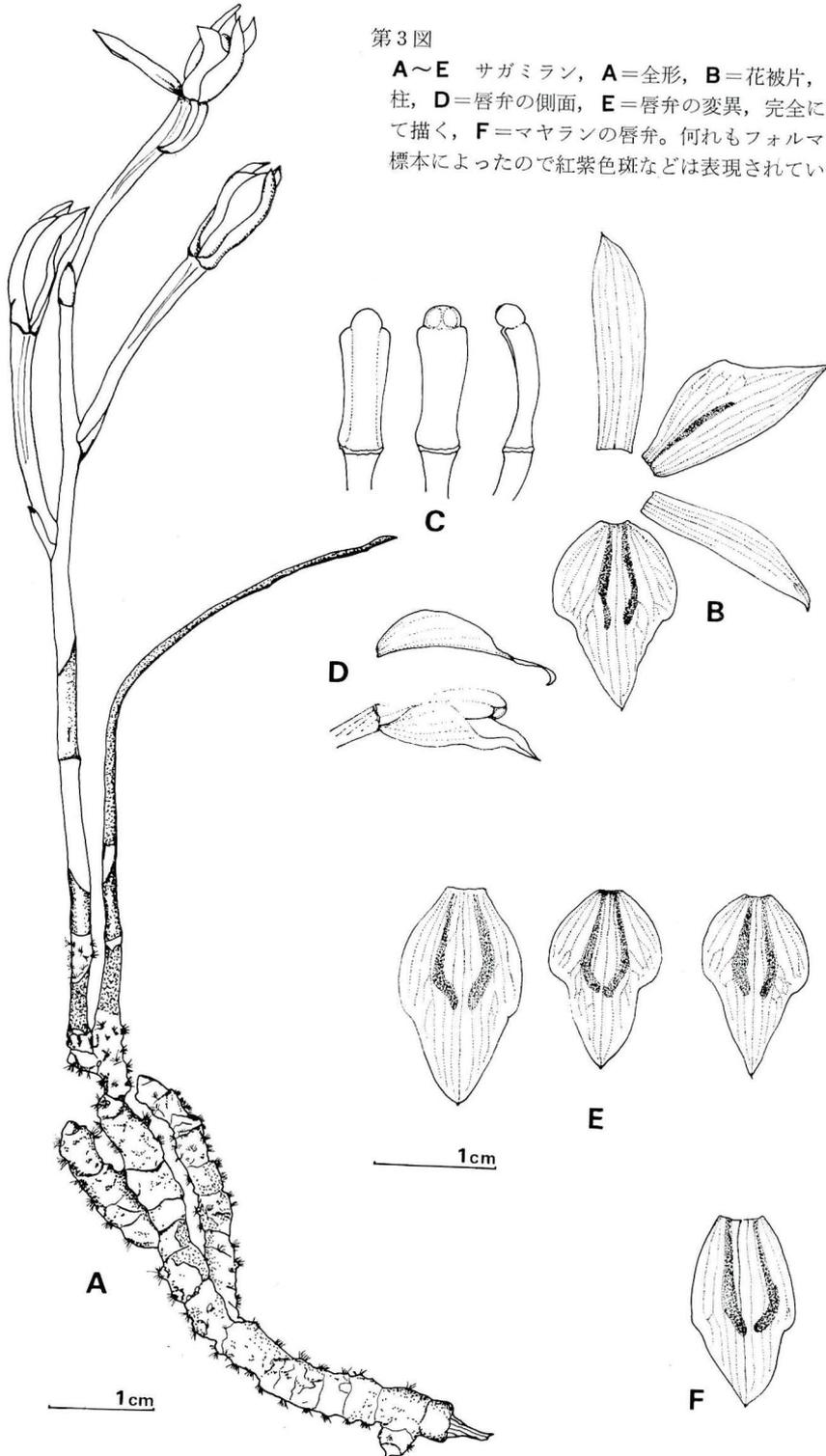
mm内外, 蕊柱と花被片は枯凋して残存する。1978年には10月18日先端より褐色化し10月末に果実が開裂したが他の個体では翌1月15日まで緑色を保ち同日の降雪の後2日間で急に褐変し開裂した。この個体は7月下旬に開化したもので, 開化が早ければ早く完熟するとは限らない。

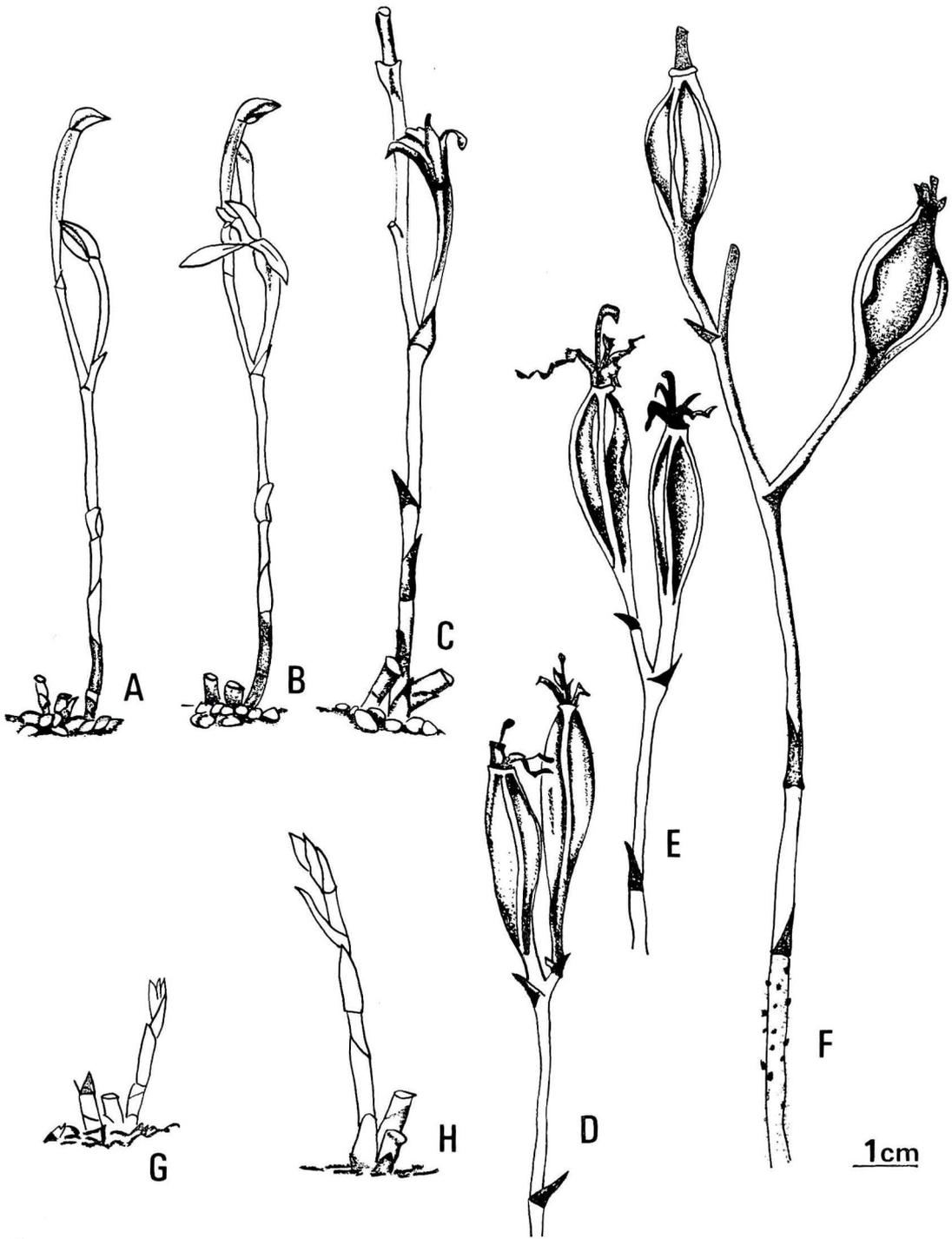
分類

上の記載で明らかなように, 両者の差は花被, 苞葉鞘葉, 茎などの色彩につきるように考えられる。全草苞葉, 花被などはサガミランの方がやや小さい傾向が認められるがその差は明瞭ではない。また秦野において両種がほとんど同一の環境にわずか数十mを隔て生育し, しかもほとんど同時に開花していることを見るとサガミランはマヤランの白花品と考えるのが最も妥当であろう。全体がやや小形な点もアルピノに見られる劣弱な生活力の故と見なすことができる。たしかに生品で見るとサガミランは色彩のほかに花弁が細く尖っている感を受けるが, 液漬標本をよく開いて見ると全く差がないといって良いほど両者は近似した形を示す。サガミランでは特に唇弁の開展が充分でなく, 先端がやや折りたたまれた状態で経過することが多いのか, 尖った感を与えている。著者達の観察した個体数

第3図

A~E サガミラン, A=全形, B=花被片, C=蕊柱, D=唇弁の側面, E=唇弁の変異, 完全に圧平して描く, F=マヤランの唇弁。何れもホルマリン漬標本によったので紅紫色斑などは表現されていない。





第4図 サガミランの成長 A. 蕾をつけた株 (Sep. 12, 1978), B. 第1花の開花 (Sep. 22, 1978), C. 第1花の凋花 (Oct. 1, 1978), D. 成熟した果実 (Oct. 18, 1978), E. 開裂しはじめた果実 (Oct. 31, 1978), F. 昨年の枯れた古い花茎と果実 (Mar. 25, 1978), G. 花茎の切り取り後に再萌芽した幼花茎 (Jul. 23, 1978), H. 花茎の成育状況 (Aug. 31, 1978).

は限られているが、観察した限りの生品はマヤランとその白花品であると一応結論しておきたい。ちょうどオニノヤガラ緑色の一形をアオテンマというのと同一のパターンであろう。

名 称

著者達の観察したものについて上記のようにマヤランとサガミランの名を当てておいたが、これら観察した個体群が従来記載されてある Taxa のどれに当たるのか、学名、和名は何を適用すべきであるか問題が残る。これについては更に本格的に調べを要するが著者達の目についた範囲でこの類の学名、和名を検討してみたい。

Cymbidium nipponicum (FR. et SAV.) MAKINO は最初 *Beltia nipponica* FR. et SAV. として記載され後に *Cymbidium* に組み換えられた。これを一般にマヤランに当て、紅紫色系の花をもつものに適用している(大井1956, 1965, 北村・村田・小山1964, 前川1971など)。しかしこのタイプが紅紫斑花を有するの否かは確証がない。中井1931は *C. nipponicum* を白色または緑黄色花を持つものとしている。マヤラン(牧野1901)は紅紫色系のものであるがその学名に当てた *C. nipponicum* の基準標本とその点が一致するか否かは疑問が残る。今急に基準標本を確かめることもできないので、一般の説に従って *C. nipponicum* はマヤランに相当すると考えておきたい。

C. pedicellatum FINET はマヤランの異名とされるが、これも確実ではない。FINET 1900 は *C. pedicellatum* と *Yoania aberrans* を記載しこの両種を同一図版上に図説している。皮肉なことにこの別属とされた2種は図で見る限り何等本質的な差が認められない。この *Yoania aberrans* は後述のサガミランの学名に用いられているものである。しかしよく見ると、*C. pedicellatum* の方が強壯で *Y. aberrans* は瘠小に見える。これを拡大解釈すれば *C. pedicellatum* はマヤ

ラン、*Y. aberrans* はそのアルビノに当るサガミランとも考えられないことはない。

Pachyrhizante sagamiensis NAKAI サガミラン(中井1931)は白色花を持つものであるが、その記載にある唇弁は3裂せず全辺というのは疑問である。乾燥標本では唇弁基部の膨大部(裂片)は蓋柱をとりかこんだまま圧されて不明瞭なことが多いし、そもそもマヤランにしても3裂というほど明瞭な裂けかたではなくやや大きく側方が張り出している程度だからである。

Cymbidium aphrodite MAKINO et F. MAEKAWA ダイトウラン(牧野1950)は裸名で、牧野:図説普通植物検索表に写真があるのみの無効名である。しかし最初、このダイトウランの発見地で採集・観察された遠藤喜之氏の教示によると、これはメダケ群落の中に生じ、全く紅紫色味のない花であったという。同氏のスケッチを見ると著者達の観察した白花品と差がないように見える。

Cymbidium aberrans (FINET) SCHLETER は先に述べたように白花系と思われるが、確実ではない。サガミランモドキ(根本1936)の名はこの学名に対し与えられた。

中井(1931)や杉本(1973)は日本にはマヤラン類に3個の Taxa があるように記しているが、著者達はマヤランとその白花品のサガミランの2個の Taxa が存在すると考える。それによって学名と和名を整理すると次のようになる。なお、この類は国外では中国やカシミールなどに近似種が知られるが、そのなかで、*Cimbidum macrorhizon* LINDL. がマヤランによく類似している。今直ちにその標本を見ることはできないけれども記載や図で見る限り、同一種と考えられる。花茎は高さ15—22cm、花弁はピンクの条線があり白色または淡い黄味をおび、唇弁は深紅色の斑点があって白色、花弁の内側には肉質の隆条がある。今後、標本を見た上で学名も再検討したいと考えている。

***Cimbidium nipponicum* MAKINO in Bot. Mag. Tokyo 18 : 107 (1904)
form. *nipponicum*.**

Matsumua, Index Pl. Jap. 2 : 240 (1905); Makino et Nemoto, Fl. Jap. 1630 (1931); Kitamura, Murata & T. Koyama, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. III 66 fig. 121 (1964); Ohwi, Fl. Jap. 389 (1956), 454 (1965); Masamune, Col. Ill. Fl. Nippon 8 : 275 fig. (1969); F. Maekawa, Wild Orchids Jap. in Col. 403 pl. 164 (1971); Sugimoto, Key Herb. Pl. Jap. 464 (1973); Kobayashi, Satomi & Hatsushima, Terasaki's Ill. Fl. Jap. 1080 (1977).

Bletia nipponica ERANCH. et SAV. in Enum. Pl. Jap. 2 : 511 (1879); Tanaka, Bot. Mag. Tokyo 187 (1971)

Cimbidium pedicellatum FINET in Bull. Soc. Bot. France 58 : 268 t IX (1900)

Pachyrhizante nipponicum (FRANCH. et SAV.) NAKAI in Bot. Mag. Tokyo 45 : (1931); Nemoto,

Fl. Jap. Suppl. 1135 (1936).

Nom. Jap. Mayaran (Yatabe 1879)

form. **aberrans** (Schlechter)

Yoania aberrans FINET in Bull. Soc. Bot. France 58 : 274 t IX (1900).

Cymbidium aberrans SCHLECHTER in Beiefte, Repert Sp. Nov. 4 : 264 (1919); Ohwi, Fl. Jap. 389 (1956); Kitamura, Murata & T. Koyama, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. III 66 (1964); F. Maekawa, Wild Orchids Jap. in Col. 404, Pl. 165 (1971); Sugimoto, Key Herb. Pl. Jap. 463 (1973).

Pachyrhizanthé aberans (FINET) NAKAI in Bot. Mag. Tokyo 45 : 110 (1931); Nemoto, Fl. Jap. Suppl. 1135 (1963).

Aphyllrorchis aberrans (FINET) SCHLECHTER in Beihefte Repert Sp. Nov. 4 : 110 (1931)

Pachyrhizanthé sagamiense NAKAI in Bot. Mag. Tokyo 45 : 110 (1931); Nemoto, Fl. Jap. Suppl. 1136 (1936); Kobayashi, Satomi & Hatsushima, Terasaki's Ill. Fl. Jap. 1080 (1977).

Cymbidium sagamiensis (NAKAI) MAKINO et Nemoto in Fl. Jap. 1135 (1930)

Cymbidium aphrodite MAKINO in Ill. Analyt. Key Jap. Com. Pl. 291 fig. (1950)

Cymbidium nipponicum MAKINO form. *sagamiense* (NAKAI) SUGIMOTO in Key. Herb. Pl. Jap. 464 (1973)

Nom. Jap. Sagamiran (Nakai 1931), Sagamiran-modoki (Nemoto 1936), Daitouran (Makino 1950)

分 布

神奈川県内におけるマヤランとサガミランの分布を神奈川県植物誌調査会のメッシュ図によって示したのが地図1および2である。1979年以降に確認した産地は黒丸で示し、文献によったものは白丸で表した。しかし田中廻次郎1887のようにマヤランを黄色花(緑白色花の意か)と記し、ムヨウランと混同している場合もあるので文献による産地は若干の疑点を残すものもある。サガミランを中井1931が新属に組み変えた際に引用した県内2産地のうち、武蔵横浜(久内清孝, Jul. 10. 1930, TNS 59474)は地点が明確でないので分布図には記していない。神奈川県におけるマヤランの古い採集記録は矢部吉禎1980の三浦半島三崎(1899年7月中旬採), 牧野1904,(相模稲村ヶ崎, 朝比奈泰彦 Jul. 22. 1902採)などがある。また FIENETの *Cymbidium pedicellatum* の基準標本は Savatier の標本であるからこれも神奈川県内で採られた可能性が高い。もしそうであるとすれば、これが神奈川県産としてマヤラン類の最も古い記録となる。

神奈川県以外では千葉県、東京都にはかなり多くの産地が知られ、北は茨城県に及ぶらしい。西は四国、九州に至る。サガミランがマヤランの白花品であるとする著者達の判断が正しければ、サガミランはマヤランの分布域内に点々と見出されるものと考えられる。

近時の野生ランの栽培熱を見ると著者達の観察したマヤラン類の正確な産地は公表を避けるのが賢明と考えられるのでここには伏せておく。野生ランのごとき稀少な植物は採取栽培を制限し、小鳥に見るごとく許可制を導入すべきで、人間の植物採取権、栽培権を無制限に自由に放置しておくべき段階ではないと信ずる。

文 献

中国科学院北京植物研究所主編 1976 中国高等植物図鑑 第5冊, p. 744 科学出版社.

出口長男 1954 サガミラン 採集と飼育 16 : 221.

出口長男 1968 横浜植物誌 p. 212. 秀英出版.

Finet, A. E. 1900 Les Orchidées du Japon, Principalement D'après les Collections de L'herbier du Muséum D'histoire Naturelle de Paris. Bull. Soc. France. XLVII : 268, 274.

Franchet, A. 1879 Enumeratio Plantarum Japonicarum Vol. 2 pt 2, p. 511.

呉応祥・陳心啓 1980 国産蘭属分類研究 植物分類学報 18 : 292-307.

Hooker 1894 Flora of India Vol. 6. Orchidaceae to Cyperaceae p. 9.

神奈川県博物館協会 1958 神奈川県植物誌 p. 74. 神奈川県博物館協会.

北村四郎・村田源・小山鉄夫 1964 原色日本植物図鑑 p. 18. 保育社

Lindley, J. 1831 The genera and species of orchidaceous plants pt 3. p. 162.

前川文夫 1971 原色日本のラン p. 402-405. 誠文堂新光社.

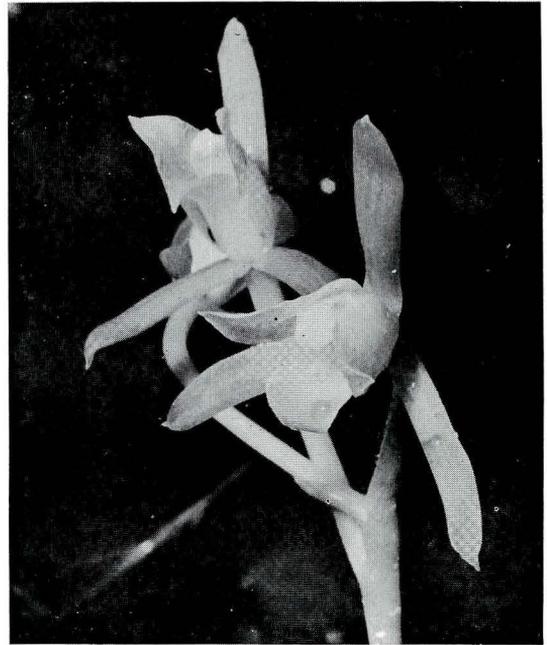
Makino, T. 1904 Observation on the Flora of Japan Bot. Mag. Tokyo 18 : 107-108.

牧野富太郎・根本莞爾 1931 訂正増補日本植物総覧 p. 1630-1631. 春陽堂.

牧野富太郎・根本莞爾 1950 図説普通植物検索表

- p. 291. 千代田出版.
- 正宗巖敬・増島弘行・石渡治一 1950 三浦半島植物誌 p. 69. 横須賀郷土文化研究室.
- 松野重太郎 1933 神奈川県植物目録 p. 77. 神奈川県植物調査会.
- 松浦茂寿 1958 箱根植物目録 p. 68. 箱根博覧会.
- 宮代周輔 1958 神奈川県植物目録 p. 70.
- Nakai, T. 1931 Notulae ad Plantas Japoniae & Korae XL. Bot. Mag. Tokyo 45: 109—110. 151—152.
- 根本莞爾 1936 日本植物総覧補遺 p. 1135—1136. 春陽堂.
- 大井次三郎 1956 日本植物誌 p. 389. 至文堂.
- 1965 改訂新版日本植物誌 p. 454. 至文堂.

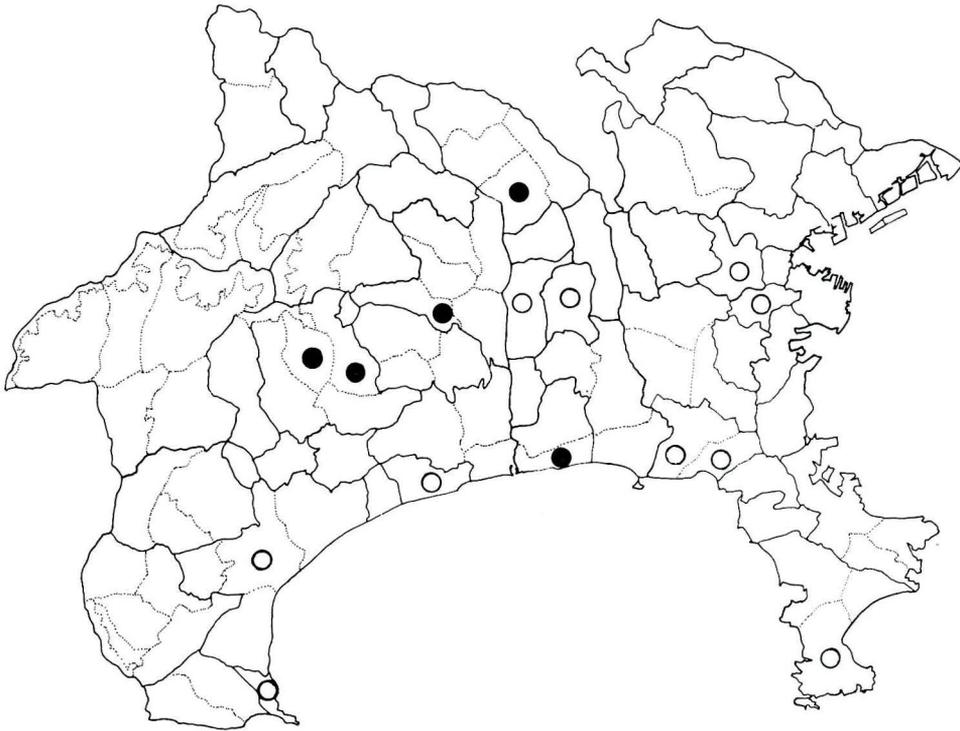
- 奥山春季 1974 採集検策 日本植物ハンドブック, 八坂書店.
- 奥山和子 1965 「神奈川県植物誌」(1958)に30種を追加する。植物採集ニュース 20号.
- Schlechter, F. R. R. 1919 Orchideologiae Sino Japonicae. Prodromus. Beihefte, Repert Sp. Nov. IV p. 264, 294—295, 270.
- 杉本順一 1973 日本草木植物総検索誌 II 単子葉編 p. 463—464.
- 田中廻次郎 1887 まやらん *Bletia niponica*, Fr. et. Sav. 1産地. 植物学雑誌 1: 186—187.
- 津山 尚 1952, 1956 日本産オニノヤガラ属雑記(2) 植物研究雑誌 27: 19—26, 31: 77—83.
- 矢部吉禎 1900 植物雑記 植物学雑誌 14: 43.
(柳川定春: 秦野市国立療養所神奈川病院,
高橋秀男・大場達之: 神奈川県立博物館)



第5図 <左> サガミランの全景
第6図 <上> サガミランの花の拡大



第7図 神奈川県におけるサガミランの分布



第8図 神奈川県におけるマヤランの分布